

小学校教員養成における造形指導に問われる課題と実践方法

丸山磨美

(京都教育大学大学院修士、大阪キリスト教短期大学非常勤講師)

A Problem and Practical Method of Art Education on the Course of Primary School Teacher Education

Mami MARUYAMA

2012年11月21日受理

この研究の目的は、今日の小学校の現場での図画工作に必要な要素は何かを考え、将来小学校の指導の現場に立つ大学生の指導のための題材を提言することである。そのため、筆者が修士論文^{注1)}で研究した幼児の描画活動の実態の分析から、その後の小学校での図画工作に必要な要素とはどういうものかを分析した。本当に図画工作に必要な要素とは何であろうか。子どもは、描いたり、造形したりすることで体験し、楽しみ、そうして自分の世界を広げていく。描いたり造形したりするたびに「積み上げ」ていくことが重要なのだ。しかし、学生の意識としては、図画工作にそういった要素が必要であるという実感はできていないのが現状ではないだろうか。美術の現状にも、子どもの表現にも、いろいろな表現の可能性はあるにもかかわらず、大人が子どもの表現を見る意識の現状は、「視覚的リアリズムに移行することが発達」というもののようだ。将来、子どもを指導する立場になる学生が、本当に図画工作に必要な要素がわかるようにするには、どのように指導したらよいのか。教師教育には、どんな題材が必要かを提言する。

キーワード：造形教育・図画工作・教師教育

I. 問題

子どもに自己表現の機会を与えることが、その子どものライフサイクルにおいて重要である。自己表現・創造活動の代表的な活動に絵を描いたり、造形したりする活動があり、その活動がきわめて大切なのである。

世の中の美術は、個性の表現がどんどん出てきている。美術史ではマニエリスムの段階で、作家が擬空間をつくり出すという、視空間に限らない表現があらわれている。1960年代に現れたスーパーリアリズムは現実をも超えた表現をし、非現実を描けば描くほどいっそう現実的な感覚を見る者に感じさせる。視空間的なものだけではなく、色そのものや、形そのものが最も優先されているような絵もある。アメリカの画家、マーク・ロスコ(1903 - 1970)の「ロスコ・ルーム」は、壁画で、見る者にある種の親密感を感じさせる「場」を創りあげている。純粹な色彩や絵画空間のありかたを考えると、子どもの絵でも、色空間が子どもを遊ばせてくれるという場合もありうるのではないか。子どもも、個別の空間の見方・あり方・捉え方で、独自の空間をつくりだそうとしているということもあるのではないだろうか。子どもの絵は、あらゆる子どもがたどる道筋として、ローウェンフェルドがいうような年齢発達の特性に大きく影響をうける一方で、個の独自の空間表現の可能性も成長するのではないか。そういった視点で筆者は修士論文で、幼児教育の現場を訪れ参与観察をし、幼児期の子どもの絵の見方を明らかにし、将来指導の現場に立つ大学生をいかに指導すればよいかを検討した。

参与観察で見た幼児の描画の様子と幼児の絵から分析して得られた結果は、幼児教育現場での子どもの絵は今までの絵の見方ではあてはまらないものが多い、ということであった。現代の幼児教育の現場では、今まで言われてきた子どもの絵の発達段階よりも、個人的差異が複式学級のように混在していた。現場の子どもの絵は、発達の上下の関係だけで語ることはできないものではなかった。幼児の絵は実に様々な過程、表現の仕方であって描かれていた。そして、幼児の絵は幼児にとって視覚だけのものではなかった。

しかし、大人が子どもの表現を見る意識は、美術の現状にも子どもの表現にもいろいろな表現の可能性があるにもかかわらず、「視覚的リアリズムに移行することが発達」と認識されている、ということが現状のようだ。

1. 「第12回ちいさな絵画展」展示作品から見る年齢発達による絵の表現の変化

絵を見たり、表現したりするときに感じている絵に対しての意識は、いったいいつ頃が変わっていくのだろうか。年齢発達による絵に対する意識の変化を各年代の作品を比較し、そこから推測して考察する。

福知山市佐藤太清記念美術館で平成24年7月21日から8月27日に開催された「第12回ちいさな絵画展」は、「福知山市内学校をはじめ幼児から高齢者まで多くの人に絵を描くことを楽しみ、また美術館に親しみを持ってもらうため、募集された絵画作品の展覧会であった。会場にはすべての応募作品が展示され、4歳から85歳までの市民によって「花・鳥・風景」をテーマに描かれた0号(14×18cm)サイズの作品2075点を一度にみることができた。展示は幼児の部、小学生低学年の部、小学生高学年の部、中学生以上の部という4部門に分けられており、年齢・発達による絵の表現の特徴を比較して見ることができた。

「幼児の部」、「小学生低学年の部」では、テーマをもとにした構想画が多く見られた。現実の視覚世界にとらわれず、表現も色もタッチも実に様々であり、この年代の表現のいろいろな可能性を感じさせた。「高学年の部」になると、テーマの「花・鳥・風景」以外にも、指導者によって条件・課題が設定されて描いたであろうと予想される、学校ごとに同じモチーフで描かれた作品も多くみられた。モチーフの配置や大きさも似ており、効率的に視覚的写実表現をする目的で、描く順序や描くものの大きさがある程度指導者によって決められていたと予想される。

「中学生以上の部の絵」は、構想画であっても視覚的に写実的な表現の作品が中心になっていた。描写はとても細かいものである。しかし「中学生以上の部」の絵は、どれも、より「きれいにまとめられて」いるのだが、「切り取られた視覚的一場面」のようであり、見る人に与える「広がり」が少ない。何か、主題を生み出す力の弱さのようなものを感じさせるのだ。描写が細くなる一方で、絵を全体に仕上げる力のほうは劣ってきているのではないだろうか。なぜそのように変化してしまったのであろうか。

2. 年齢発達による絵に対する意識の変化

子どもの年齢が上がり、社会的意識が発達していくことによって、描く欲求が「描く行為そのもの」や「自分だけが楽しむ絵」から、「誰が見ても描いているものがわかる絵」へと変化していくということが予想される。絵と絵に対する意識は、小学校高学年頃から変わっていくのではないかと予想される。小学校の図画工作の授業でも、小学校高学年ごろから視覚的に写実的に描く指導がなされるようだ。

「第12回ちいさな絵画展」の高学年の作品に、効率的に視覚的写実表現をするために、指導者によって描く順序や描くものの大きさがある程度決められていた、と予想されるものがみられた。そういった指導の目的は、子どもの「誰が見ても描いているものがわかる絵を描きたい」という欲求に対して「できた」と、自信を持たせることであるのかもしれない。しかし、それらしく見える、「よいように」見えることを重視するあまり、描きかたやバランスを「知識」として教えるだけということになっているのではないか。そもそも絵には正解・不正解はないはずで、図画工作はむしろ「正解がない」ことを重視して表現の幅を広げることをささえる教科なのだ。描きかたを「知識」として教えるような指導では、子どもに「その描きかたが正解である」という誤解を与えかねない。それでは、「写実が絵の到達点である」という教育になってしまう。

イギリスの美術批評家・ハーバート・リード(1955)は、時代が空間の認識をもっている、時代の心的構造が反映されるとみた。リードは個人ではなく社会のイメージで空間の見方がちがってくる、時代で特徴があるという。学校現場での絵に対するイメージは、「より視覚的に写実的に描けるようになることが発達である」ということになっているのが現状なのではないか。子どもの写実的に描きたい欲求というのは、そもそもそういった教育の方向があるから出てきているのではないか。

美術の現状としては、「絶対的なものがある」ということはないのだ。その作家の個別の空間の見方・あり方・捉え方があり、作家そのものが独自の空間をつくりだそうとしている。幼児の描画活動に見られたように、子どもの場合はもっと体験的で可能性があるのではないか。何のための図画工作であらうか。幼児期より後の、様々

な意識が変化してくるであろう小学校の子どものため、本当に図画工作に必要な要素はどんなものであろうか。将来、子どもを指導する立場になる学生にそれがわかるようにするには、どのように指導したらよいのか。図画工作の役割を考えた教師教育の題材は、どんなものがよいのであろうか。

Ⅱ. 目的

この研究の目的は、今日の小学校の現場での図画工作に必要な要素は何かを考え、小学校教員を養成する大学教育における今後の学生の指導の題材を提言することである。

Ⅲ. 方法

この研究の目的は、今日の小学校の現場での図画工作に必要な要素は何かを考え、将来指導の現場に立つ大学生の指導の題材を提言することであった。そのため、2つのアプローチをとった。第1のアプローチでは、修士論文で研究した幼児の絵と描画の様子の実態の分析から、その後の小学校での図画工作に必要な要素はどういうものかを分析した。

第2に、第1のアプローチの分析と身近に見られる子どもの実態を踏まえ、将来指導の現場に立つ大学生の指導にはどのような活動が必要かを分析し、学生の指導のための題材案を提言した。

Ⅳ. 幼児の描画から考える小学校図画工作に必要な要素と教師教育に必要な題材

1. 幼児の描画から考える小学校図画工作に必要な要素

(1) 幼児教育現場で見た幼児の描画の様子と分析

修士論文で観察・分析した幼児教育現場で見た幼児の描画の様子と分析から、主なものをあげてみる。



図1 C1 (3歳児) の描画の様子



図2 C1 (3歳児) の「ぐるぐる」最終段階の絵

A. 幼児の描画行為事例1

C1(3歳児)は、描きはじめに、紙の中心部に顔を描いていた(図1)。顔を描いた上にもスクリブルを重ねて描いたので、仕上がった作品(図2)を見ると顔の存在は見えなくなっている。しかし、子どもの描く過程をみていると、子どもは「まだそれしか描けないから」スクリブルをするというだけではないことがわかった。子どもは紙の上に自分がクレパスで線描きをすることで、かわっていくということを楽しんでいた。

B. 幼児の描画行為事例2

C2(5歳児)は一見スクリブルのように、線を重ねて描いていた(図3)が、保育者がC2に何を描いたのかを聞くと、「もえてんねん」「海賊」「閉じ込められてる」などと話し、絵の中で色々なお話が展開していた。何かを視覚的に描きあらわそうとしたのではなく、ペンを使って



図3 C2 (5歳児) の絵

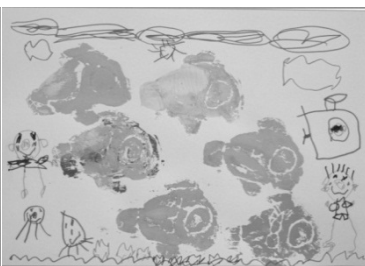


図4 C3 (5歳児) の絵

遊んだ軌跡が線になっていたのだ。描いている過程を見ていると、子どもにとっては絵も「遊び場」になるということが見えた。

C. 幼児の描画行為事例3

C3(5歳児)は家族で海に行った時の楽しかった気持ちをもう一度絵に描きながら味わい、さらに公開保育の助言者と話しながらかいて作り出した世界で遊ぶように絵を描き、表現の幅がひろがっていった(図4)。C3は絵の中でいろいろな体験をしていた。こういった体験を子どもは成長に役立てていくのであろう。

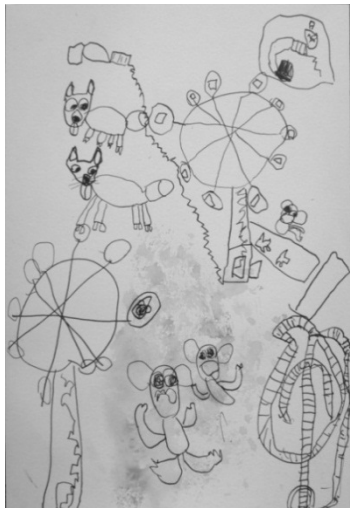


図5 C4(4歳児)の
「ゆうえんちはおやすみ」の絵

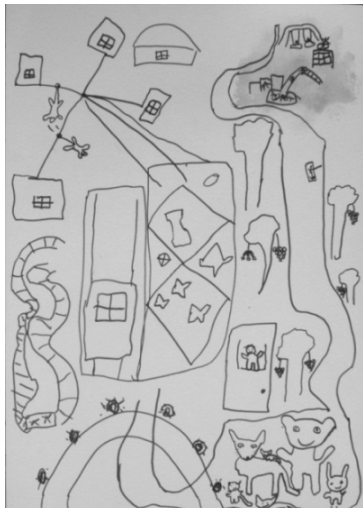


図6 C5(5歳児)の
「ゆうえんちはおやすみ」の絵

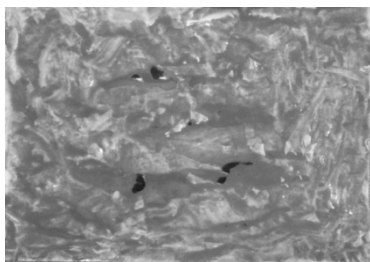


図7 C6(3歳児)の
「かわ」の絵

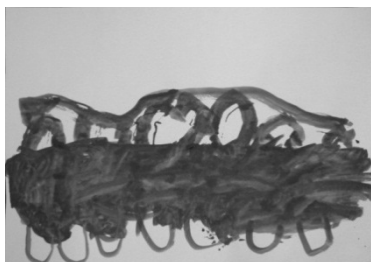


図8 C7(3歳児)の
「でんしゃ」の絵

すべて塗りつぶした。そして、C6は、「できた。」「かわ。」と言った(図7)。画面は青紫の絵の具で満たされ、全体的に濡れて光り、紙は波打っていた。それは遠くから見た川の外形ではなく、中に入って水遊びをする「川」そのものであった。C6は水彩絵の具の体験と水体験を重ねているようだ。C6は波型の線を重ね描きながら、「川」そのものをつくっていった。子どもの絵は絵地図・風景などが描かれたものだけではなく、直接体験の姿ということもある、ということに気づかされた。

G. 幼児の描画行為事例7

C7(3歳児)は、C6と同じ活動で、丁寧に「でんしゃ」を描いていたが、「けす。」と言って、塗りつぶし始めた。C7は「でんしゃ、ちか。」と言い、今度は丁寧に車両を塗り始めた。C7は保育者に「ちかてつですか?」と聞かれ「ちかてつなんかちかはいっていかへんやん。」「はんきゅう。」と話した。C7は、電車が地下に入るイメージを持って「暗くなる」ように塗りつぶしはじめたとも考えられるが、白かった電車を塗りつぶしているうちに、暗い地下を走る電車のイメージと結びついていき、地下に入っていくことにしたということも考えられる。C7は、塗ることで「地上から地下に入った」というイメージを描きながら体験し、過程が含まれる絵をつくったようだ(図8)。

このように、幼児教育の現場で見た子どもの描く絵は視覚だけのものではなく、子どもが感じる五感その他の

D. 幼児の描画行為事例4

『ゆうえんちはおやすみ』¹⁾というお話の絵を描いていたC4(4歳児)は、描画中、隣で描く子どもとお互いの絵の中の遊園地で遊ぶように、話しながらかいていた。遊びの中でイメージが拡がり、描きたいものがどんどん出てきたようであった(図5)。

E. 幼児の描画行為事例5

C5(5歳児)も、『ゆうえんちはおやすみ』というお話の絵を描いていた。動物たちの体を一続きの線で描き、モチーフが画面全体に配置され空白があまりない、計画的でデザイン性が強い絵であった(図6)。C5は、自分の中のお話の世界を絵でしっかり説明して伝えたかったのではないだろうか。

F. 幼児の描画行為事例6

C6(3歳児)は白色画用紙(四つ切り)に、「青紫色(青と紫とグレーの混色)の水彩絵の具と筆で好きなものをように描く」という活動で、スクリブルのように描きはじめた。C6はとんとんと音をたてながら点を描き加えていった。そして、真ん中から塗り始め、筆を細かく前後に動かしながら塗っていき、12分という長い時間をかけて画用紙を

すべての感覚が含まれているようであった。視覚的表現だけにはとどまらない表現、それこそが子どもにとってのリアリティであった。絵の中で遊んだりする中で、絵の表面からだけでは見えない子どもの深い体験がそこにはあった。そのような絵は子どもの「体験」として見るべきだ。子どもは、描くことで体験し、楽しみ、自分の世界を広げていく。絵を描くたびに「積み上げ」ていくのだ。次に描く絵もそんな積み上げから生まれる。「うまく見えるように」保育者が手立てして描いても、その「積み上げ」はできない。

現場で見た幼児の表現は多彩であり、保育者の想像の枠にはとうてい入らないものであった。保育者のイメージに近づけるための指導ではいけないということがわかる。指導の目的は上に引き上げるというのではなく、子どものもっているものを思う存分出させることである。

小学生になっても、幼児期に持っているような、表現に対しての感覚をより伸ばしていくことが必要だ。子どものもっているものを思う存分出させ、そして「積み上げ」のできるようにすることが必要であろう。

(2) 小学校図画工作に必要な要素

子どものもっているものを思う存分出させ、主題を生み出し深める力や感じ方を育てていくには、小学校の図画工作の題材にどのような要素が必要だろうか。幼児教育現場で見た子どもの絵と描画の様子から、題材には次のような要素が必要であると考えられる。

- ・ 表現で「思いを語る」、「伝える」
- ・ プロセスを楽しむ、過程で発見・工夫を得る
- ・ 感じ取る
- ・ 体験する 「絵の中の世界を体験」「造形の体験」「素材の体験」
- ・ 遊ぶ
- ・ 共有・共感する

そして、それらを積み上げていくことが重要である。

表現する欲求が主観的表現から客観的表現に移行していく児童期中期以降も、幼児の主導的活動であった構想表現の活動も続けていくべきであろう。「幼児期は図式的な表現力を駆使して思いを語る力を育て、(児童期は)その力をヨコにふとらせていく時期である」²⁾。幼児にとって絵を描くことは自分を表現することであり、「ことば」であった。そういった役割は、児童期以降も必要であろう。

多くの幼児の作品で、できあがった作品よりも、どうしてその絵が生まれたかというプロセスにこそ意味があった。子どもの絵は、子どもが表現するために発見した描き方でしっかりと表現されていた。児童にとってもそういった体験が大切であろう。「過程で得られた発見・工夫に意味がある」³⁾のだ。

また、「描きたい」「表現したい」という気持ちは、「感じ取る」ことによって生まれる。大切なことは子どもの感じ取る力を育てることであろう。「感じとった」経験は、「知識がある」だけでは描けない表現を生む。

子どもは絵の具でも、単純に「描くための材料」としてだけ使うのではなく、その色、形態などを多角的に感じ取り、実に様々な表現をしていた。それが表現につながっていくのだ。子どもが素材を体験できる場を大切にしたい。

子どもは絵や造形の中で遊ぶ中で、イメージを広げていく。また、友達の表現をみとめるなど、共感しあったりすることができる。

現代の子どもの日常生活の中では、色々な素材に触れて、そこから何かをつくりだし遊ぶ、楽しむという場が少なくなっている。このような時代だからこそ教育現場で様々な体験をすることが大切になっており、そこに美術教育の大きな役割がある。子どもたちの豊かな経験があつてこそ表現が生まれ、表現することによって感じ取る力が育っていく。子どもたちができるだけ多彩な、多くの体験を積み重ねられるようにすることが重要である。そしてその子なりの表現をすることが保障されている場をつくることが指導者に求められる役割である。また、子どもが想像する力、イメージする力を大いに活躍させることができるように、「人間の遊び心を刺激する」のが指導者の役割である。

2. 小学校で将来図画工作を教える学生に必要と考えられる題材の提言

(1) 学生の教育に必要な要素

しかし、学生の意識としては、図画工作にそういった要素が必要であるという実感はできていないのが現状ではないだろうか。このままの意識では、学生が指導者になった時に、例えば図画工作の授業において「先生に言われたとおりに描いていけば、誰でもそう見えるように描ける」というような「方法」を指導してしまうかもしれない。しかし、「次も先生が描く方法を教えてくれないと描けない」のでは意味がない。そのような指導では、子どもの「積み上げ」はできないのだ。

絵や造形には正解はない。指導者は、子どもが様々に表現してよいと感じられる環境をつくることができなければならない。指導する側になる学生が子どもの表現を感じ取れるようになるには、まず意識を変えていくことが必要である。子どもが想像する力、イメージする力を大いに活躍させることができるように、「遊び心を刺激する」ことができるようにならなければならない。そのためには、学生にはどんな活動が必要であろうか。それには、上手になりたいという欲求にダイレクトに答えるような題材をするのではなく、遊びをたくさん含んだ題材を体験していくことが必要であろう。遊びの体験の中で、学生も、感じる力や表現する力を交差させて伸ばしていくことが必要なのである。

例えばひとつ10秒というようにして、まず描いてみよう、その次描いてみよう、その次描いてみようというように、短時間で発想して次々に描いていく体験をしておくこともよいであろう。「思いつく」体験を多く重ね、発見、発想を続けていく。そのように、発想を広げるということを自己体験する中で、自分が発想できることに気付いていき、それが、自信につながっていくであろう。

一つ一つを作品として作り上げることが重要なのではない。作品自体を到達目的と考えず、成功の連続だけではないプロセスをカリキュラムの中に導入することが必要である。

(2) 学生に必要な題材案の提言

次に、小学校で将来図画工作を教える学生にさせたい題材案を提言する。

A. 「線遊び」

線は、造形活動に欠くことができない要素である。色々な線を描き、「線遊び」を体験してみる。「線遊び」をしているうちに、遊びの線が増え、線の種類が多くなってくる。また、「線遊び」をしているうちに、描いている行為や描いたものの中からいろいろな発見ができる。遊びの軌跡や意図して描いた線が入り乱れて重層化し、それがやがてタブローになっていく。ドローすることがこんなに面白いのだと感ずることこそが描く意欲となり、「積み上げ」につながるのだ。

線は、ボールペン・パス・マジックなどの身近な描画材を使って紙に描いていく。

(ア) 題材「丸がいっぱい」

ボールペンで、紙に丸をたくさん描いていく。紙を変えて、ちがう大きさの丸を描いていく、丸を敷き詰めるなど、色々なパターンを試してみる。次に、ランダムに選んだ丸の中を好きな色のパスや絵の具で塗りつぶす。ひとつ何秒と時間を決めて、短時間で丸の中に次々に何か描いていく

(イ) 題材「重なる線」

色々な線を思いついてボールペンで描き、線を重ねていく。紙に線を重ねていき、なんとなく白く残る部分などをつくる。線の重なりが粗なところと、どんどん線を重ねる密なところをつくってみる。



図9 C8 淡路島に行ったよ(小学1年生絵日記)

B. 「描く」題材案

自分の表現というのは、主題を表現したい、伝えたいという気持ちから出てくる。描きたいものを題材にしてこそ思いがでてくるのだ。子どもたちが描きたいような、もちあじある主題とはどんなものであろうか。

指導者は入り口の情報だけを入れて、自分の絵を描いていけるようにすることが必要だ。

C8 は、絵日記に、たくさんの親戚と海に行ったときの絵を描いた

(図9)。海を描いた後、左から順番に人物を描いていき、右端まで人物を描いた。そこで、全員を画面に描ききれないことを残念がった。C8は、「～をしているところ」などの、一場面を再現するのではなく、「海が広がっていた」ということと、「みんながいた」ということが描きたかったことなのだ。1人、つけまつげをした親戚がいたことが再現され(右から3番目の人物)、印象深かったところはしっかりと描かれている。

学生が「描く題材」に取り組むときも、視覚的一場面の再現にこだわらず、意識して、何をあらわしたいかを中心に描いてみる、という体験も必要であろう。

(ア) 題材「お話の絵」

本のお話のはじめの部分だけ指導者が読み聞かせる。続きを想像して絵に描いていく。または、お話の導入部分を各自でつくり、紙に書いて友達と交換し、それを読んで、その後の話を想像して絵に描いて相手に伝える。相手を楽しませるような、遊びの感覚を働かせ、想像して絵を描いていく。

(イ) 題材「気分切替機」

大人になると、今を楽しく過ごせばよいのに、「来週、面接がある」、「意見の合わない人がいる」など、何か、憂鬱な気持ちをついついひきずってしまう。気分切替機があって、楽しいことだけ考えられたいのになあ。もしも楽しいことだけ考えられたら、「どこへ行こう」とか「好きなことばかりしよう」など、想像して描く。

(ウ) 題材「どこでもドア」

紙の真ん中に自分を描いて枠を描く。そこから開いているドアを描く。それは「どこでもドア」。周りに行きたいところのイメージを描く。「バラ色の世界」など、色で描いてもよい。

(エ) 題材「目を閉じたら」

パステルで、目をつぶった一瞬に頭に浮かんだもの、目に浮かんだ色など、小さなカードに次々と描いてみる。たくさんまったら、大きな色画用紙に貼ってながめ、自分の中に潜んでいる色を楽しむ。

(オ) 題材「のこしてイメージ」

新聞・雑誌をランダムに切る。記事の中から、言葉や写真など、自分の「気になったもの」を2つ3つ、時間をかけずに、感覚で見つける。(決めかねる場合は、目をつぶって鉛筆で指すなどして決める。)'気になったもの'から'何か'を感じ取る。'気になったもの'だけを残して、水彩絵の具などで'気になったもの'のイメージで周りに色を塗る。色の感情がたくさん出てくるようにする。そこに何かを描き加えていく。



図10 5歳児 シールの活動

(カ) 題材 「シール de アート」

子どもの創作意欲をかきたてる材料を使う。シールは子どもが自ら貼りたくする素材である。2012年8月21日に清教学園幼稚園で開催された公開保育・第55回幼児造形 Koyasan 集会での5歳児の描く活動では、描き終えて描く場所を離れていた子どもが、保育者がシールを出してくると再び戻って、描いた絵にシールを貼ったりまた描いていったりし、楽しんで表現を広げていった(図10)。

題材の展開は、まず丸シールを中心に、色々な色、大きさ、形、のシールを多数用意する。紙は大きさ、形など不定形で色もさまざまなものを用意する。紙に好きなようにシールを貼っていく。まばらに貼っても、線のようにつないで絵を描いても、貼り重ねて面にしてもよい。そこにカラーペンで自由に描いていく。またシールを貼ったり、描いたりしていく。紙をつなげていってもよい。

C.「造形」の題材案

(ア) 題材 「地面にまち・アミューズメント！」

昨今の幼児の絵には、はやくに基底線が出て、上が上で下が下に描く絵が多く出ているように感じられる。子どもはよく地面に絵を描いて遊ぶが(図11)、最近では道路などは危険で子どもたちの遊び場にはならない状況である。道に絵を描いたりする経験があまりないため、普段、自分が動いて大きく描いたり、



図11 地面に絵を描いて遊ぶ(小学4年生)

あちこちの方向から描いたり見たりする経験はあまりできない。自分の今の位置から視界に入る、固定的な視点からぬけだせなくなってしまうということも考えられる。あちこちに動いて地面に描き、描いて作った大きな空間の中に自分が身を置いて、「入り込んで」遊んでみる。

題材の展開は、まずはじめに、地面の自分のまわりに、チョークなどで大きく囲いを描く。そこを自分の「住みたいうち」に描いていき、友達の家とつなげてマンションにしたり、共同して街をつくっていったりして広げていき、「あったらいいなのお店」や「遊ぶ場所」や「秘密基地」など、自由に発想して描いて遊ぶ。



図12 「妹と虫捕り」



図13 「お店屋さん」

(イ) 題材 「分身の術～」

自分のかたどりをして自分の分身をつくり、一緒に過ごす。

子どもは、本来なら、幼いころに人形やぬいぐるみで遊ぶうちにどのように手が出ていて、どのように足が出ているかなどのイメージ(ボディイメージ)が内在化していくというが、昨今は大学生でもボディイメージが曖昧な学生もみられるという。からだの形を紙にうつしとって、立体にし、自分はこんな形なんだ、これぐらいの大きさなんだと感じながら、もうひとりの自分と対面してみる。

題材の展開は、まずクラフト紙を貼り合わせて大きな紙を作り、その上に寝転がる。

友達にペンなどで寝転がった体のまわりに線を描いてもらい、体形をとる。別の紙をもう一枚重ねて描いた形より少し大きめに切りぬいて、間に新聞紙などをつめて肉を付け、紙の端を少し折りこんで周りをホチキスでとめる。顔を描いて毛糸などで髪の毛を付け、紙やスーパー袋で服を作って着せる。自分の分身を連れて歩いてみたり、いつも自分が座っている椅子に座らせたりする。

参考写真の作品は、小学校1年生による親子制作であるが、昆虫が好きな子どもは折り紙で昆虫を、廃材で虫取り網を作って持たせた(図12)。おしゃれが好きな子どもは着替えやファッション小物をつくり、レジも作ってお店屋さんを作った(図13)。(もし低学年児が作る場合は、周りを一周ホチキスでとめるには握力が持続しないので、補助が必要である。)

(ウ) 題材 「おおきなせかい」

「自分の体が小さかったらどんな感じかな」「世界が大きくなったらどんな感じかな」と想像しながら、そんな場面をつくってみる。

題材の展開は、はじめに自分の写真を撮り、厚紙に貼って切抜き、「ミニ自分」をつくる。友達と一緒に組み合わせたり、遊ばせたりしながら、教室の中でも野外でも、好きなところに置いて写真に撮る。

写真にフキダシ形のシールを貼って、ひとこと言わせてもよい。

(エ) 題材 「〇〇一族のくに」

たくさんの同じ形を、一族と見立ててみる。

題材の展開は、まず紙を折ったり重ねたりして、人型や動物型に切る。(丸や三角など幾何学形でもよい。)同じ形がたくさんできるので、それらを「一族」として住みかをつくってあげたり、壁に貼ったり、遊ばせてあげたりする。または、描く題材として、紙に貼ってまわりに(色で表現しても形で表現してもいい

ので) 一族の世界を描く。

(オ) 題材 「光 WORLD」

光によって、物の見え方のイメージは大きく変わる。いつも使っている教室でも、当たっている光が変わると、見え方がまったく違って感じることを体験する。光と闇によって、空間をいつもとちがうように

感じたり、作ったものに美しさや面白さを感じる。

題材の展開は、まず、「真っ暗な世界といえど？」と問いかけて意見を出し合う。「海底」「地底」「宇宙」「夜のまち」「夜の森」など、イメージを広げていく。イメージをもとに、作ったものや紙、または色々な素材(例えばセロハン、障子紙などの透ける素材もよいだろう。)を置いたり、共同して天井や壁から張り巡らせたりしたもの、蛍光絵の具で色を塗ったり絵を描いたりし、「ある世界」をつくる。明かりを消し、ブラックライトで照らす。

参考写真(図 14)は短期大学 2 回生の制作である。牛乳パックや廃材で家を作り蛍光絵の具を塗って、白い紙を道に見立て、街をつくっている。学生はその後にブラックライトで照らすことは知らず、街が出来上がったところで電気を消し、ブラックライトで照らすと歓声があった。学生は「夜の街」、「テーマパーク」、「夜のスキー場」など、見たことのある景色を思い出したり、想像上の世界を思い浮かべたりした感想を述べていた。ブラックライトで照らされた中、スライムに蛍光絵の具を混ぜたものを作って遊ぶのも、また違った感覚が生まれて面白い。



図 14 ブラックライトで街づくり

(カ) 題材 「きらきらかんてん」



図 15 布団圧縮袋に水と寒天を入れる



図 16 つぶして感触を楽しむ



図 17 つぶしたものを瓶詰に



図 18 型取りして遊ぶ



図 19 乾燥させてみる

感触遊び、色遊びを楽しむ。知識や想像ではわからない素材の不思議さや感触をリアルに体感しながら、遊んだり、美しさを楽しむ。

題材の展開は、粉寒天を湯に溶かし、熱して食用色素などの染料でいろいろな色を付ける。色々な形の型に流し込んでかためる(常温でかたまるが、型ごと水または氷水につけると、はやくかたまる。)固まったら、型から出し、かたまりを切ってみたり、型抜きしたりして遊ぶ。その後は、感触や温度など十分に味わいながら、自由な遊びへとつなげていく。

参考写真では、小学生が布団圧縮袋の中に、固めた寒天を入れ、水を入れていっている。色つきの寒天が水に流されてぐるぐる回ったり、ゆらゆらゆれ

たりして美しい(図15)。握ってつぶしたりし、手で感触を楽しんでいる(図16)。自然に、ビンに詰めてながめる(図17)、つぶしたものを型につめてひっくりかえす(図18)などの遊びが展開していた。色々な色で層にして眺めても美しいだろう。最後は、乾燥させて、その変化を楽しむ(図19)。

V. 結論

昨今の小学生は忙しい日常のなかに身を置いている。そして、子どもたちをとりまいている現代社会の中では、子どもたちが日常の遊びの中で色々体験していくよりも先に「受け身の、できあがった楽しみが手軽に得られる」ものが子どものそばにやってきてしまい、手や体を動かして、時間と手間をかけて何かを作る、想像して遊ぶ、イメージして遊ぶなどの遊びが減っている。しかし、子どもは、難しい手間のかかることであっても「やりたいこと」に出会ったら楽しんでやりとげてしまうのだ。現代、必要なのは、そういった機会に出会うという「場」である。図画工作で、表現する楽しさ、ともにつくる楽しさ、達成感をあじわってほしい。たとえ言葉が育っていても、伝えたいことがないと言葉も使えないのだ。伝えたいことは、「感じ取る」・「思い描く」ことができないと生まれてこない。「表現する」・「共感する」ことができないと伝えられない。図画工作で、「感じ取る」・「思い描く」・「表現する」・「共感する」をのばして行ってほしい。子どもは絵を描いたり、表現したりすることによって気持ちを伝えたり、表現した体験や表現したものをみることから、自分でも気付いていないことに気づいたりすることができる。よく気付く・よく感動することを積み上げて行ってほしい。

学生も、そういった体験をして、「気づき」、それから指導にあたらなければならない。「表現したい」とはどういうことか、考えながら、感じながらやってみておくことが必要である。「イメージを広げる」楽しみを体感しておくことが必要である。そうして、普段の子どもの様子から子どもが自ら「描きたい」「作りたい」と思うものを感じ取り、主題を考え、子どもの表現の素晴らしさを感じ取りながら指導できるようになってほしいと思う。

注1)「幼児教育の現場における子どもの絵の見方の諸課題—子どもの表現の現状と大人が子どもの表現を見る意識の現状—」,京都教育大学大学院教科教育専攻美術教育専修, 修士論文 2011 年 3 月

引用・参考文献

中野隆二・村田利裕(1988)『幼児・初等教育 造形コース』,日本色研事業株式会社

1) 戸田和代・作 たかすかずみ・絵 (2007)『ゆうえんちはおやすみ』,岩崎書店

2) 新見俊昌(2010)『子どもの発達と描く活動 保育・障がい児教育の現場へのメッセージ』,かもがわ出版 p. 196

3) 美術手帳編集部編(2012)『図工室にこう 2』,美術出版社 p. 26